



東京都生まれ。江戸っ子

2016年 こんまり流片づけコンサルタントの資格を取得。
2019年 4月 NHK スペシャル「密着取材片づけ 人生をやり直す人々」にて、お片づけの現場が放映される。お片づけを通して、お客様の理想の暮らしの実現を目指しています。

安藤 恵子さん (NAGAYA AOYAMA)

「片付け」はときめく理想の暮らしを送るための手段

片付けに深く関わるようになったのは親族の遺品整理がきっかけです。とにかく物があふれて住みにくそうな部屋を見て、元気うちに、快適な暮らしのための片付けをしてあげたかったな、と思って。その後、他の親族の転居を手伝う機会もあったのですが、やはり物が多く散らかっていたので「捨てろ、捨てろ」としきりに言っていたら、その親族をひどく悲しませてしまうという経験もありました。

片付けの難しさを実感していた時、偶然目にしたのが近藤麻理恵さんの『人生がときめく片づけの魔法』という本でした。あんなに大変だった片付けに今、ときめくモノを選ぶという発想に目から鱗が落ち、私も片付けを実践することにしました。

こんまりメソッドによれば、片付けは今ときめくものを大事にすることであり、捨てられない理由は過去への執着と未来への不安だといいます。私の捨てられない物は昔買った高価なバッグだったり、いつ使うかも分からない英語のテキストだったり。今を生きていないとつくづく思いました。

付き合いや参加していた集いなど、そういった人との関わりも自分に正直に整理することで、自分の暮らしがどんどん楽しくなっていくのを感じました。この体験は多くの人に伝える価値があると思い、「こんまり片付けコンサルタント」という資格を取って仕事にしました。

NAGAYA AOYAMA は私の友人が立ち上げに関わったと聞いて知りました。片付けのワークショップはNAGAYAの会議室で実施しています。今は時節柄オンラインが中心ですが、様子を見ながら少人数でも開催しています。オフィスと言うと殺伐とした感じを想像しますが、いつもほんわかとした温かい雰囲気です。ウッドデッキから眺める空の広さにもときめきますね。

私の目的は片付けではなく、理想の暮らしを送っていただくことです。片付けた後に何をしたいか、それを一番大切にしています。言わば「夢や暮らしを形作る」仕事ですね。まずは自分がどんな暮らしをしたいか、ときめく暮らしを大いに想像することから始めていただいています。その後なんです、片付けは。

岡田 一樹さん、岡田 絢子さん (NAGAYA 8f)

お互いを補い合う、公私にわたるパートナー

一樹さん (以下、K)：建築の仕事に憧れ、15歳の頃から建築の勉強を始めました。谷口吉生に師事し、彼の事務所に10年弱勤めましたが、2017年に独立。現在は妻の絢子と一緒に仕事をしています。

絢子さん (以下、A)：私は広告系の仕事をしていたのですが、建築やインテリアに関心があり手伝うようになりました。図面の作成や技術的な仕事は彼が担当し、私はインテリアの選定や内装のカラーリングなどの空間づくりを行っています。

K：ご依頼は戸建ての住宅や別荘が中心です。私たちの作品を見て問い合わせくださる方が多いですね。建築業界では伝手で仕事を頂くケースもよく聞きますが、私たちはスタイルや考え方を積極的に打ち出しているの、共感していただいた方からオファーを頂くとうれしいです。

A：建築業界は全体的に情報発信が盛んではないのですが、今はオウンドメディアが大事な時代。前職の経験を活かし、私が SNS などで戦略的に情報発信をしています。おかげさまで徐々に仕事にもつながるようになってきました。

K：お互いを補い合って仕事をしている感じですね。独立したての頃は資金的に賃貸のオフィスを借りるのが難しく、自宅近くのシェアオフィスを検討する中で8fと出会いました。同業ではありませんが、さまざまなデザインに携わっている方が入居していて、とても刺激を受けています。他愛のない話やちょっとした話題を共有すると自分の考えが客観的に見えてくることもあって、シェアオフィスならではのメリットを感じています。

A：以前は自宅で作業をしていましたが、自宅では仕事と家庭の切り替えが難しいですね。最近在宅勤務の方も多いですが、どうやってみんな切り替えているんだろう (笑)。

K：うちの場合は子供もまだ小さいので、同時に仕事をするというのは不可能ですね。

A：8fは本当に雰囲気が良いです。仕事に行き詰まっている時でも、会社以外の人たちと雑談していると気持ちが楽になります。仕事で頂いたお菓子をお裾分けし合ったり、刺激を受けつつもほっとできる空間です。



©JOESUZUKI

左：建築家 岡田一樹

1984年兵庫県生まれ。2009年京都工芸繊維大学大学院建築設計学専攻修了。

2009年～2017年 谷口建築設計研究所勤務、2017年 R.E.A.D. 設立。

右：インテリアデザイナー 岡田絢子

2007年文化女子大学卒業。2017年 R.E.A.D. 設立。

世界 150 都市以上を旅する夫婦おすすめの「旅先」とは？

2021/02/19 「NAGAYA Online Cafe vol.4」開催レポート



▲(左から) 鈴木陵生さん、鈴木聡子さん

去る 2021 年 2 月 19 日、NAGAYA Online Cafe を開催しました。4 回目のゲストは、NAGAYA の会員でもあり、映像作家・鈴木陵生（すずきりょうせい）さんとヨガインストラクター・鈴木聡子（すずきさとこ）さん夫妻に登壇していただきました。鈴木さん夫妻は、BS 朝日「旅する鈴木」という番組にも出演されています。

旅の始まりは、結婚 2 年目の 2011 年。新婚旅行としてメキシコから世界一周を始めたそうです。訪れた地はすでに 48 か国 150 都市以上！オンラインイベントでは、そんな世界各地の知られざる名物グルメや、美しい建物、遺跡、珍しい動物、景色などをお話していただきました。

前半は、陵生さんが手掛けた、株式会社 NTTdocomo の「森の木琴」の CM 映像を見ながら制作秘話を伺いました。間伐材で作った携帯を通じた森林保全への取り組みを描いた映像で、間伐材でできた巨大な木琴が、森の静寂にバツハを奏でます。

この映像は後に、グッドデザイン賞受賞とカンヌ国際広告祭金賞を受賞。見たこともない、幻想的で素晴らしい映像に皆さん釘付けでした。まだご覧になられたことがない方は、ぜひ「森の木琴」と検索してみてください。

後半は、鈴木さん夫妻の旅のお話を聞かせていただきました。世界各国を旅している鈴木さんが、コロナ明けにおすすめしたい観光地はフィリピンの「カオハガン島」という場所だそうです。カオハガン島は、セブ島から船に乗って 1 時間半ほどのところにあり、人口は 650 人ほど。あちらこちらで声を掛けて観光客との交流を楽しむ島民の皆さんが多く、なんととっても自然の豊かさが素晴らしいとのこと。宿は Wi-Fi も通っているので 1 週間ほど滞在しながら仕事、なんてこともできるそう。

参加者からは、「今まで行った旅先で一番おいしかった料理は？」「ずっと夫婦でいて喧嘩はしないの？」「旅で苦しかったことや辛かったことは？」など質問が止まらず、終了ギリギリまで交流ができたオンラインイベントとなりました。旅に行くのが難しい昨今だからこそ、まるで旅をしているようでとてもワクワクした時間になりました。

また、それぞれの環境からオフィスの括りを超えて参加いただいた皆さん、ありがとうございます。オンラインならではの交流に楽しさを感じられる会を引き続き企画していく予定ですので、お気軽に参加してくださいね！私も、コロナが明けたら早速、旅をしたいと思います！（書き手：原田）

NAGAYA では、隔月のペースで「学び」や「わくわく」をシェアするさまざまなイベントを企画・開催しています。

次回オンラインカフェはゴールデンウィーク明けの開催に向けて計画中。お楽しみに！

NAGAYA サポーターからひとこと

NAGAYA の活動を見守り応援してくださっているさまざまな分野のエキスパート、「NAGAYA サポーター」からメッセージを頂いていますのでご紹介します。

椎名 隆行さん

GLASS-LAB 株式会社 代表取締役・江戸切子プロデューサー
ラジオパーソナリティ



私自身、NAGAYA のメンバーにめちゃくちゃ助けられています。HP の英語翻訳、Amazon への出品、イベントの開催などなど、困ったときに相談するとみんな力を貸してくれる。あまり知り合えないプロと出会える場が NAGAYA だと思っています。プロフェッショナルの集合体に属しているメリットは計り知れなく、多様な職種に触れ合うのも素晴らしい。私も引き続き NAGAYA 清澄白河をバックアップしていきます。是非、広瀬さんとスタッフの皆さんを「活用」してください！笑

[NAGAYA 広瀬より]

椎名さんと出会い一緒に立ち上げた合同会社カツギテ。NAGAYA っぽい下町深川と人との関わり感謝しています。

編集後記

今回も自分がこれまで知れなかった世界をインタビューやオンラインイベントで知ることができ、とても刺激を受けました。NAGAYA に関わり始めて出会うことのない人と出会える楽しみができて、ワクワクしています ^^ (原田優香)

大変お待たせしました、#003 完成しました！隔月発行を目指しているものの、年度末はどうにも慌ただしく……そんな中でもインタビューやメッセージにご協力くださる方々や、お仕事の合間に読んでくださる方々がいることが励みになっています。ぜひ今後もお付き合いください。「インタビューしてほしい」という立候補も大歓迎です！（吉澤瑠美）

執筆・編集：原田優香、吉澤瑠美
コーディネート：広瀬新朗